

論文

不定を表す「誰+か」の構文的分布

姚 佳秀¹

Syntactic distribution of "dare+ka" indicating indefiniteness

Jiaxiu YAO¹

Abstract

In this article, the application conditions of "dare+ka" will be analyzed based on grammar. Through analysis, it comes to the following conclusions: 1. As "dare+ka" could link with particles in a sentence, "dare+ka" has to be explained as a well-organized concept. 2. "dare+ka" normally indicates a vague notion, however, "dare+ka" turns into a definite person when combined with other compositions, since it represents a same content as what follows subsequently. 3. "dare+ka" has to be put after "NP+ka", since it initiates a parallel relation when followed by "NP+ka"

キーワード 不定 構文的分布 使用条件

Keywords: indefiniteness, syntactic distribution, using conditions

1. はじめに

文における疑問詞は疑問の意味を表すのが普通である。しかし、下記の例(1)に示すように、疑問詞が現れていても疑問の意味を表さない場合もある。

- (1) 椅子に座るには、誰かを押しつけなくちゃいけない。(『朝日新聞』2016/02/28)
- (2) 「これを借りて行っていいかな。誰か読める人がいる筈だからね。偽物か本物かも分かるにちがいない。調べてみるよ。」(山下洋輔「ドバラダ門」)

例(1)(2)では疑問詞の「誰」が「か」を伴い、それとともにまとまった意味・機能を表している。例(1)における下線部の「誰+か」は疑問の意味を表しているのではなく、特定できないという意味を表し、例(2)における「誰+か」は後続の「読める人」と同一概念を表している。本稿ではこのような意味・用法を持った疑問詞による表現を「不定表現」と位置付ける¹⁾。

本稿の目的は、不定を表す日本語の「誰+か」の構文的分布を明らかにし、そうすることによって、第二言語教育や第二言語習得のためのルールを確立することにある。以下、2では先行研究の妥当性を検証し、本稿の

代案を示す。3では不定の意味を表す「誰+か」の用例を確認しながら、具体的な分布状況を浮き彫りにする。4ではまとめを行う。

2. 先行研究と本稿の立場

いわゆる「不定表現」に関する研究は数多くみられるが、代表的なものとして三尾(1979)、益岡・田窪(1992)などが挙げられる。三尾(1979: 73-90)では、疑問詞「誰」の主な用法について「疑問用法」「不定個称」「不定全称」のように三分類されている。「不定個称」「不定全称」の違いについては、次のように説明されている。

「不定個称」: 「誰か」などの形態で、前提集合のうちのあるメンバーを指すもの。

「不定全称」: 「誰も」などの形態で、前提集合のうち全てのメンバーを指すもの。

三尾(1979: 73-90)の「前提集合」というとらえ方に焦点をあてて考えれば、「誰+か」という構造は必ずある「集団」を構成する一個人を表さなければならないの

¹ 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程

Doctor course of Intercultural Studies, The International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan
2016年5月24日受付、2016年7月26日採録

だろう。しかし、狭義的に考えれば、「家族の誰か」「四人の誰か」については、そのように解釈することが可能であるが、「誰かと話している」「誰かにつくらせる」については、そのように解釈することが不可能である。「集団」というものが必ずしも存在しているとは限らないからである。

また、論理的に考えれば、「集合」と「個称」は対立の概念を表すので、「集合」ということばで「誰かと話している」「誰かにつくらせる」のような表現を説明するのは妥当とは思えない。つまり、「誰かと話している」「誰かにつくらせる」のような文の成立は「集合」を前提条件としないので、三尾(1979: 73-90)の説明は厳密さが欠けているといわなければならない。

一方、益岡・田窪(1992: 38-40)ではいわゆる不定表現を「不定語」として位置付けられている。当該研究でいう「不定語」は「疑問詞+か」だけではなく、「疑問詞+も」「疑問詞+でも」も含まれている。以下では、益岡・田窪(1992: 38-40)での論述をそのまま引用する。

不定語——疑問語に「か」「も」「でも」のついた語。
不定の対象を指し示す語。

「-か」不定の対象の存在を表す。

「-も」(否定表現を伴い)対象の不存在を表す。

「-でも」任意の対象を表す。

「誰もいない」「誰も知らない」の表す意味は「不定」であるかどうかを別として、アスペクトの観点から考えれば、「誰か止めてくれ」「誰か助けてください」は完了のことでなく、眼前の状態でもないの、「存在を表す」とはいえない。益岡・田窪(1992: 38-40)においても、「誰+か」の使用条件についてほとんど具体的に触られていない。

さらに、三尾(1979: 73-90)、益岡・田窪(1992: 38-40)で示されたルールでは、例(1)(2)はいうまでもなく、例(3)のような現象についても十分に説明することができない。

(3) 昔から口寄せの巫女をしていたと云う事だけは、
母親か誰かから聞いていました。(芥川龍之介「妖婆」)

統語機能の観点からみれば、例(3)における「母親か誰か」が対等の関係にある。このような構造における「誰+か」の意味・機能については、先行研究では具体的に触れていないようである。

これまでの研究では、例(1)(2)における「誰+か」はそれぞれ異なる意味を担うものとして扱われている。しかし、文法上、例(1)(2)における「誰+か」は一つのまとまった概念を表すものとして格助詞を伴っているので、名詞に近いはたらきをしていることは事実である。また、例(2)における「誰+か」は後置の「読める人」と同格関係にあり、例(3)における「誰+か」は前置の「母親か」とともに並列関係をつくっていると思われる。以上のような事実に基づいて、本稿は意味特徴のほかに、統語機能や文環境も視野に入れて分析し、次のような代案を提示する。

意味論の観点からみれば、「誰+か」は基本的には「はっきりと定まらない」という一つのまとまった概念を表す。統語論の観点からみれば、「誰+か」は一つの内容語として、さらに格助詞を伴い文を展開させることが可能であり、また、同格関係や並列関係を構成することが可能である。ただし、例(2)に示すように、同格関係における「誰+か」は必ずしも漠然とした概念を表すわけではない。

3. 「誰+か」の構文的分布

以下では、格助詞を伴う場合、同格関係を結ぶ場合、並列関係をつくる場合の意味・用法に焦点をあてて、この代案の有効性を証明する。

コーパスを分析した結果、不定を表す日本語の「誰+か」の構文的分布は次のようになっていることを突き止めた。それは①「が」を伴い主語として機能する場合、②「を」を伴い目的語として機能する場合、③「が」「を」以外の格助詞を伴う場合、④同格関係を結ぶ場合、⑤「~か+誰か」の形で並列関係を表す場合である。まず、主語として機能する場合の意味・用法をみる。

3.1. 主語として機能する場合

「誰+か」は主格を表す格助詞の「が」を伴って、主語として機能することができる。

日本語では、文を形成するために、主語が必ずしも必要ではないとされているが、主体が「はっきりと定まらない」という場合は主語が生起するのが普通である。下記の例(4)(5)(6)(7)では、主語としての「誰+か」がないと、文の意味が変わったり不完全になったりするのである。

(4) 「大丈夫よ、そんなことないわよ」

突然、背後で誰かがそう言った。甘い女の子の声

だった。(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

- (5) 何度か電話がかかってきたが、僕は受話器を取らなかった。

誰かが時々ドアをノックしたが、僕は応えなかった。(村上春樹「ダンス・ダンス・ダンス」)

- (6) 不審火は移転後の空家に誰かが入り込んで焚火をした結果らしい。(山下洋輔「ドバラダ門」)

- (7) 靖子がレジスターの紙を入れ替えている時だった。ガラス戸が開き、誰かが入ってきた。(東野圭吾「容疑者Xの献身」)

統語機能の観点からみれば、例(4)(5)(6)(7)における「誰+か」は名詞的役割を果たしているがゆえ、一つの内容語としてとらえられる。つまり、「誰+か」は主格を表す「が」を伴い、後続の「言った」「ドアをノックした」「入り込んで焚火をした」「入ってきた」といった述語の主語として機能しているのである。ただし、「誰+か」は格助詞の「が」を介せずに動作や状態を表す動詞の直前に来ることがある。

- (8) 扉が開き、誰か出てきた。(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

- (9) ヒト殺し？水をぶっかけられたみたいに、ワタルは目が覚めた。

「ヒトゴロシ？ どういうことですか？ 誰か死んだんですか？」(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

- (10) 伯父さんは言って、足元を確かめながら、ゆっくりと階段をのほり始めた。一步ごとにステップを懐中電灯で照らして、注意深く観察しながら進んでゆく。「誰か出入りしてるなら、ゴミぐらい落ちそうなもんだかな」(「ブレイブストーリー」宮部みゆき)

文脈から見て、例(8)(9)(10)における「誰+か」は主語として機能していると思われる。それにもかかわらず、それに続くはずの「が」は形としては現れていない。主格を表す格助詞の「が」が省略されたと考えられる。

ただし、働きかけのモダリティ²⁾が文末に現れた場合は、主格を表す「が」が省略されたのではなく、そもそも生起しにくいと認めなければならない。次の例(11)(12)(13)(14)では主格を表す「が」が現れると、文が不自然となる³⁾。

- (11) 懸命の形相で猛チャージする鈴木啓太が肘打ちで倒されるが笛は鳴らない。誰か止めてくれ。リュウジは他力本願になってしまう。(野沢 尚「龍時」)

- (12) なす術もなく、栗橋浩美はただ叫び続けた。助け
てくれ、誰か助けてくれ——(宮部みゆき「模倣犯」)

- (13) 「くそ。誰かあのむさ苦しい水夫を早くどこかへ連れて行け。サトウ続行せよ」(山下洋輔「ドバラダ門」)

- (14) ああ大変だ。誰か一一〇番して！ そんな声が入り乱れる。(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

例(11)(12)(13)(14)に示すように、話し手が相手たる聞き手に話し手の自らの要求の実現を働きかけ、訴え掛ける場合、つまり、文末にいわゆる働きかけのモダリティが現れる場合は、格助詞の「が」が現れないのが普通である。例(11)(12)(13)では、述語が命令形であり、例(14)の「して」も命令の意味を表すものとしてとらえられる。働きかけのモダリティはこれらの形式によって担われているのである。

3.2. 目的語として機能する場合

「誰+か」は動作の対象を表す格助詞の「を」を伴って目的語として機能することができる。主語として機能する場合の「誰+か」と同じように、目的語として機能する場合の「誰+か」も一つのまとまった概念を表すものとしてとらえられ、名詞的役割を果たすのである。

- (15) 急に、置いてきぼりにされたような気がした。それでいて、誰かを置き去りにしてしまったような気もするのだった。(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

- (16) うちの家では母がそう言って誰かを連れてきた時は、「気に入らん奴連れてきたから、息子よ、遠慮せずにポッコボコにしまえ」という意味の暗号になっている。(中場利一「さあ、きょうからマジメになるぞ!」)

- (17) 一人でもいいから、心から誰かを愛することができれば、人生には救いがある。(村上春樹「1Q84」)

- (18) 彼に対して、何かを捨てたり、隠したり、誰かを言いくるめて口裏をあわせたり、言い訳の筋骨きを練ったりする時間を与えてはならない。(宮部みゆき「模倣犯」)

- (19) 思いを紙で伝えたい誰かを思って紙に文章をしたためのイベント「紙で伝える展」が、22日から神奈川県鎌倉市の「銀の鈴ギャラリー」で始まる。(「朝日新聞」2015/08/20)

例(15)(16)(17)(18)(19)における「誰+か」は後続の「を」の生起によって、それぞれ「置き去りにする」「連れてくる」「愛する」「言いくるめる」「思う」といった他動詞の目的語として機能し、漠然とした「ある

人」という意味を表すことになる。「誰+か」は主語として機能する場合、主格を表す「が」が省略されうが、目的語として機能する場合は、目的格を示す「を」は省略することが不可能である。省略されたら、「誰+か」が目的格を示すものなのか主格を示すものなのか、判断しにくくなるからである。

3.3. 他の格助詞を伴う場合

「誰+か」という形式は格助詞の「が」「を」を伴い、主語や目的語として機能する例が圧倒的に多い。そのほか、「に」「の」「と」「から」「へ」「で」「より」「まで」といった格助詞を伴い、文を展開させることがある。また、「誰+か」は「より」を伴い、比較の基準や起点を表したり、「まで」を伴い、状態の限度や終点を表したりすることもあるが、用例がさほど多くないので、ここでは取り上げないことにする。

3.3.1. 格助詞の「に」を伴う場合

「誰+か」という形式は、格助詞の「に」を伴い、動作・作用の向けられる相手を表したり、受身表現における動作の主体を表したり、使役表現における動作の仕向けられる側を表したりすることがある。格助詞の「が」「を」を伴う場合と同様に、格助詞の「に」を伴う場合の「誰+か」も名詞的役割を果たすものとして認められる。

3.3.1.1. 動作の向けられる相手を表す場合

「誰+か」は「に」を伴って、文を展開させる場合の意味・用法は主に主述文において動作の向けられる相手を表す場合、受身文の主格を表す場合、使役の対象を表す場合に分布している。主述文において、後続する動詞が意志動詞であれば、「誰+か」はその動作の影響を受ける側を表すことになる。

- (20) 特にこの国営天文台には、連邦議会や各都市の星読み台との間を往復しているのだろう、しきりとカルラ族たちが舞い降りている。そのうちの誰かに頼めば、何とかかなりそうだ。(宮部みゆき「プレイブストーリー」)
- (21) 彼女はその心の重荷をいつか誰かに告白しないわけにはいかなかった。(村上春樹「IQ84」)
- (22) 一方、誰かに相談した女性50.3%にとどまった。3年に一度の「男女間における暴力に関する調査」で、昨年12月に無作為に選んだ全国の成人5千人を対象に実施。(「朝日新聞」2015/03/27)
- (23) 神野は大学生の頃からイラストレーターを目指していたのだが、一風変わった男で、今までちゃんと誰かについて絵を習ったということがなかった。

(宮部みゆき「模倣犯」)

「頼む」「告白する」「相談する」「習う」といった動詞は意志性があり、主述文に生起していれば、相手格を必要するという統語的性格を持っている。例(20)～(22)では動作の向けられる相手が「誰+か」によって示されている。ただし、相手となる人がそれと定まっているわけではない。例(23)の「誰+か」は「について」を伴っているが、それも動作の向けられる相手を表すものとしてとらえられる。ただし、「～について習う」には付き従うというニュアンスが含まれていることは否めない。

3.3.1.2. 受身表現の動作主を表す場合

「誰+か」は格助詞の「に」を伴い、主述文に生起し、動作の向けられる相手を表すほかに、「誰+か+に」の形で受身文にも生起しうる。そのような場合の「誰+か」は述語の表す動作の実質的な担い手を表すことになる。

- (24) 彼が最初に思ったのは、そんなところを誰かに見られなくてよかったということだった。もし誰かに見られたら、どんな騒ぎが持ち上がるか見当もつかない。(村上春樹「IQ84」)
- (25) 一年もしたらどうせ離婚だ、と誰かに慰められ、やけ酒を食らったのかもしれない。(野沢 尚「龍時」)
- (26) 背中側から両肘を誰かに抱えられている。その誰かに寄りかかり、かろうじて頭を持ち上げることができた。(宮部みゆき「模倣犯」)
- (27) 誰かに悪しきことをされても、それは忘れておしまいなさい。(「朝日新聞」2015/04/27)

例(24)～(27)における「誰+か」は格助詞の「に」を伴っているにもかかわらず、例(20)(21)(22)と異なって、動作の影響を受ける側を表すのではなく、影響や作用の出どころを表している。このような見解は例(24)～(27)の「誰かに見られる」「誰かに慰められる」「誰かに抱えられている」「誰かに悪しきことをされる」を主述文に変えると、「誰かが見る」「誰かが慰める」「誰かが抱えている」「誰かが悪しきことをする」のようになることによって裏付けられる。

ついでに触れておくと、「誰+か」が格助詞の「に」を伴い、影響や作用をどこから受けるかという意味を表す場合、後続の「に」は格助詞の「から」で置き換えることができる。

- (28) 「困ったときには寄りかかってもいい。しかし、誰かから寄りかかられたときには、その倍の力で支えることができるような人間になれ」。これが共に

生きる社会だと私は思う。(『朝日新聞』2015/01/18)

(29) 人は誰かを愛することによって、そして誰かから愛されることによって、それらの行為を通して自分自身を愛する方法を知るのです。(村上春樹 [1Q84])

例 (28) (29) における「誰+か+から」の意味は「誰+か+に」の意味と大差がない。つまり、文中の動詞が受身化された場合は「誰かから」であろうとも、「誰かに」であろうとも、「から」「に」の前置成分が動作を起こす主体を表すことには変わりがない。

3.3.1.3. 使役の対象を表す場合

「誰+か+に」という構造は受身文に限らず、使役文において、使役の対象(述語動詞の表す動作の担い手)を表すことができる。ただし、受身文に現れる場合の「誰+か+に」と異なって使役文における「誰+か+に」は「誰+か+から」のように置き換えて言うことが不可能である。

(30) ひとりでは手に余ることなので、毎回誰かに手伝わせるのだが、今回は名指して篠崎に頼んだ。(宮部みゆき『模倣犯』)

(31) 「牢屋は入るものではない。作るものだ」などという言葉も思い浮かんだ。「いや牢屋は作るものではない。誰かに作らせるものだ」(山下洋輔『ドバラゲ門』)

例 (30) (31) に示すように、「誰+か+に+V+せる(させる)」という構造における格助詞の「に」は使役の対象を表すが、その使役の対象は特定の人ではない。そのような意味・機能を持つ「に」は「から」で置き換えると、非文になる。つまり、格助詞の「から」は行為を起こす主体を表すが、働きかけの対象を表さないので、例 (30) (31) のような文環境には生起しえないのである。

3.3.2. 連体修飾関係を結ぶ場合

「誰+か」は格助詞の「の」と一緒になって連体修飾関係を結ぶ場合、二つのパターンがある。一つは「の」を受けて連体修飾構造のヘッド(主要部)として機能するパターンであり、もう一つは「の」を伴い連体修飾構造の修飾部として文を展開させるパターンである。

3.3.2.1. ヘッドとして機能する場合

「誰+か」という形式は格助詞の「の」を受けて連体修飾構造のヘッドとして機能する場合、連体修飾関係が結ばれるが、そのような連体修飾構造のものがさらに主語として機能したり目的語として機能したりするのが普通である。

(32) およそ12年間にわたり、4人の誰かは必ずタイトルを保持していたが、「四天王」全員が無冠となった。(『朝日新聞』2013/10/18)

(33) 愛犬がどうしてもどの留守番方法も受け入れなかった場合、家族の誰かが一緒に留守番をするか、海外旅行はあきらめて愛犬を同伴できる旅行先に変更する、ということも考えてあげてください。(『朝日新聞』2013/10/17)

(34) やはり、兄とか嫂とか、もしくは父とか、いずれ反対派の誰かを痛めなければ、身動が取れない位地にいた。(夏目漱石『それから』)

(35) 借金取りからの指令は「この家の誰かを騙して借金を肩代わりさせろ」。しかし待っていたのは、とんでもなく厄介で性悪な家族だった。(『朝日新聞』2015/05/08)

例 (32) (33) (34) (35) では「4人」「家族」「反対派」「この家」といった体言は連体修飾構造の修飾部として、後続の「誰+か」と意味関係を結んでいる。意味特徴の角度からみれば、例 (32) (33) (34) (35) の修飾部とヘッドとの間に包含関係ができています。つまり、ヘッドとしての「誰+か」は前置修飾語の表す内容の一部となるので、不特定ではあるが、その中の一員としてとらえられる。

また、例 (32) (33) の下線部の連体修飾構造は主語として機能し、例 (34) (35) の下線部の連体修飾構造は目的語として機能しているのである。しかし、動詞や助動詞の連体形、または形容詞の連体形を受ける場合は「の」が排除され、連体修飾関係が潜在化する。

(36) 幻界からヒト柱に選ばれる誰かと違って、ものすごい人数のなかの一人じゃない。(宮部みゆき『プレイブストーリー』)

(37) 看護婦は美人だった。ピースが以前、白衣を着てたらどんな女も三割増しに見えるんだと言っていたことがあるが、この看護婦は本物の美形だった。そして、栗橋浩美の知っている誰かを思い出させた。誰だろう？(宮部みゆき『模倣犯』)

(38) まるでそこにはいない誰かを弾劾するような強い口調で、短く言い足した。(宮部みゆき『模倣犯』)

(39) それを無視しなかったのは、誰にも迷惑をかけなかったからだ。ドアの外にいる誰かは、何か急用があって訪ねてきたのかもしれない。(東野圭吾『容疑者Xの献身』)

例 (36) (37) (38) (39) における「誰+か」は格助

詞の「の」を受けていないとはいうものの、前置成分との意味関係が連体修飾関係として認めなければならない。ただし、名詞の修飾を受ける例(32)~(35)と異なり、活用語の連体形を受ける「誰+か」は前置修飾語との意味関係が包含関係ではない。このような意味のずれは例(32)~(35)と例(36)~(39)を比較してみても一目瞭然である。

つまり、「4人の誰か」「家族の誰か」「反対派の誰か」「この家の誰か」という連体修飾構造における「誰か」は「4人」「家族」「反対派」「この家」の中の一員であるのに対して、「選ばれる誰か」「知っている誰か」「そこにいない誰か」「外にいる誰か」という連体修飾構造における「誰か」は前置修飾部の表す行為や状態の主体と見なされうる。

3.3.2.2. 修飾部として機能する場合

「誰+か」という形式は連体修飾構造のヘッドになるだけではなく、それ自体が一つのまとまった概念を表すものとして格助詞の「の」を伴い、連体修飾構造の修飾部として機能することもできる。

(40) 以前、誰かのミスは他の人間が補うという日本デカラについて書きましたが、まさしくそういった場面でした。(『朝日新聞』2013/11/24)

(41) 私の家のように、人民班の誰かの子どもが行方不明になれば、監視はより厳しさを増す。私は2006年に会寧市から脱北を図って逮捕されたため、1次監視対象だったうえ、娘も脱北して「行方不明」となり、いっそう厳しい目で見られていた。(『朝日新聞』2015/03/27)

(42) 「LINE 友達が300人もいる子もいるよ」誰かの発言を読んで、相手の画面に「既読」表示をつけたらすぐ返信するようにしている。(『朝日新聞』2013/11/19)

(43) しかし、何をやるにも誰かの手を借りずにはいられなくなり、自分で思うように食事もできず、だんだんと食べなくなりました。(『朝日新聞』2013/09/18)

統語的には、例(40)(41)(42)(43)における「誰+か」は名詞の機能を果たし、連体修飾部として後続のヘッド部に連なっている。「誰+か」と後続の体言によって構成される連体修飾構造は、さらに主語として機能したり目的語として機能したりすることができる。例(40)(41)に示すように、「誰+か+の」とヘッド部によって構成された連体修飾構造は主語の一部として機能するこ

とが可能であり、また例(42)(43)に示すように、目的語の一部として機能することも可能である。

意味的には、例(40)(42)の「誰+か」はヘッドとしての「ミス」「発言」といった動作の主体としてとられ、例(41)(43)の「誰+か」はヘッドとしての「子ども」「手」の所有者としてとらえられる。このように「誰+か」は連体修飾構造の修飾部として機能したりヘッドとして機能したりすることができるのである。

3.3.3. 格助詞の「と」を伴う場合

「誰+か」は格助詞の「と」を伴い、動作の影響を受ける側の人を表したり、また一緒になって物事をする人を表したりすることがある。そのような場合の「誰+か」も体言相当の意味・機能を担うものとしてとらえられる。

(44) かなり訛のきつい英語で誰かと話し、手帳に予定を書きこんでいる。(野沢尚「龍時」)

(45) 亘は土埃にまみれているのだった。

「血が出てるじゃないか。学校の帰りだね？ 誰かと喧嘩でもしたのかな」(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

(46) 普段は誰かと練習することを好むが、開幕3日前から1人でバットを振り込んで仕上げた。(『朝日新聞』2015/04/01)

(47) 「でも、運命の塔に行く道中だけならば、誰か一緒に行ったっていいよな？ だからその、俺がついていってもさ」(宮部みゆき「ブレイブストーリー」)

「話す」や「喧嘩する」といった行為は相手を必要とするものである。例(44)(45)における「誰+か」は行為の対象となる側を表すものとしてとらえられる。また例(46)における「誰+か」は物事を一緒に行う人を表していると解される。例(44)(45)(46)では、主語は形として存在しないが、省略されたと考えられる。例(47)では、「誰+か」の後に格助詞が現れていないものの、動詞の意味性格からみて相手格を表す「と」の省略として考えても差し支えがないだろう。

3.3.4. 格助詞の「から」を伴う場合

格助詞としての「から」は起点や出発点、または出どころを表すが、そのような意味・用法の拡張として、変化する前のもとの状態を表したり、「が」のかわりにもとのや情報の与え手を表したりすることがある。「誰+か」はそのような意味・用法を有する「から」を伴い、文を展開させることができる。

(48) 親を介護すると、人は誰しも誰かから生まれ、大

きな時間軸の中で生きている、一人ではないんだということが、はっきりと分かります。(『朝日新聞』2014/08/21)

(49) 4月に ASKA 容疑者が誰かから覚せい剤を譲り受け、それを渡したであろう人物(楯内容疑者)も、確実に覚せい剤を所持していた証拠があった。(『朝日新聞』2014/05/18)

(50) 今でもタイから来日する人が誰かから聞き、「日本でタイ料理を食べるならここ」と、先代の名刺を持って店を訪ねてくることがあるという。(『朝日新聞』2011/08/30)

(51) 後ろの誰かから「サッカー選手なら俺も『ツバサ』を知ってるぞ」と声がかかります。(『朝日新聞』2014/06/23)

例(48)では、格助詞の「から」が生起しているがゆえ、文中の「誰+か」は変化する前のもとの状態を表すものとしてとらえられる。例(49)(50)(51)における「誰+か」は定かでない出どころを表していると解されうるが、また間接ながら、動作を起こす主体を表すものとしてとらえられる。

3.3.5. 格助詞の「へ」を伴う場合

「誰+か」は「へ」を伴い方向性を持つ述語とともに使うことがある。以下の例(52)(53)に示すように、「誰+か」は格助詞の「へ」を伴い動作や変化の向けられる相手を表すことができる。ただし、その相手は漠然とするものでなければならない。

(52) 撮り続けることは自分だけでなく、やがて見知らぬ誰かへ伝わり、動かし、変えていく力があるのかもしれない。と山本さんは話す。(『朝日新聞』2014/08/29)

(53) 自宅や職場、学校での必需品から、誰かへ贈るギフトまで、日々の暮らしをサポートする「無印良品」の小型ショップです。(『朝日新聞』2014/04/04)

例(52)(53)における「伝わる」「贈る」は方向性を含意する述語としてとらえられる。そのような述語は常に動作や変化の影響を受ける側を要求するので、文中の「誰+か」が漠然とした受け手を表している。また、「誰+か+へ」という構造はさらに格助詞の「の」を伴い、連体修飾語関係を結ぶことがある。

(54) 「誰かへの恩返しとして、エイズ問題に取り組むたい」。そんな奨学生たちの思いをくんで今年から、世界版あしなが運動を始めた。(『朝日新聞』2015/03/04)

(55) 2位にも「不用意な発言で家族の誰かを傷つけたり、怒らせたりしてしまった」が続いており、家族の誰かへの衝動的な発言や行動が家庭内での失敗とピンチの大きな要因のようです。(『朝日新聞』2014/04/25)

(56) 誰かの、誰かへの思いがあるから、球児は強くなる。(『朝日新聞』2013/07/15)

(57) 本書は、フランスでは口コミで人気が広がり、読後に誰かへの贈り物にするためにまた購入する人が多く、「ギフトセラー」とも呼ばれているようだ。(『朝日新聞』2008/12/14)

例(54)(55)(56)(57)における「へ」は格助詞の「に」と類義関係にあるとはいうものの、連体修飾関係を結ぶ「誰+か+へ+の」は「誰+か+に+の」のように置き換えて言うことは不可能である。格助詞の「に」は格助詞「の」の後続を許さないからである。

このように、「誰+か」はほとんどの格助詞と共起することができるので、3.1. 3.2. 3.3の議論を通して、第2節で提出した「誰+か」が一つのまとまった概念を表すものだという仮説の妥当性はいっそう支持されるものとなるのである。

3.4. 同格関係を結ぶ場合

「誰+か」は後続の名詞、または名詞フレーズと同格関係を結ぶことが可能である。これまで述べてきた「誰+か」はとらえどころのない意味を表すのと異なって、同格関係を結ぶ「誰+か」は後続の名詞、または名詞フレーズとほぼ同じ意味範疇を持つ。そのため、それに含まれた意味内容は必ずしも漠然としたものではない。

(58) いよいよ都内を舞台に、世間に対するパフォーマンスを始めようと具体的な計画を練り始めたときから、筋書きをより面白くするためには、誰か第三者を巻き込んだ方がいいというアイデアがあった。(宮部みゆき『模倣犯』)

(59) 「これを借りていっていいかな。誰か読める人がいる筈だからね。偽物か本物かも分かるにちがいない。調べてみるよ」(山下洋輔『ドバラダ門』)

(60) 「誰か有名な人でも来てるんか。」デレツとした顔で女学生に近寄る。(中場利一「さあ、きょうからマジメになるぞ!」)

(61) 「だけど俺にはおまえを助けることなんかできない。おまえの親父さんを助けることができないのと同じようにな。俺にはできない。だから、誰かほかに、おまえを助けてくれる人を探しなよ」(宮

部みゆき【模倣犯】

(62)「隣のクラスには、誰か実物を見たヤツはいるの？
一緒《いっしょ》に「スケッチに行ったヤツらは
見たんだろ？」（『ブレイブストーリー』宮部みゆき）

例(58) (59) (60) (61) (62)では「誰+か」が後置の二重下線部の名詞や名詞フレーズといわゆる同格関係を結んでいると思われる。具体的にいえば、例(58) (59) (60)における「誰+か」はそれぞれ後置の「第三者」「読める人」「有名な人」と同一の概念を表すものとしてとらえられる。また、例(61)における「助けてくれる人」と前置の「誰+か」との意味関係についても、例(62)における「見たヤツ」と前置の「誰+か」との意味関係についても、同様に解釈することができる。

さらにもう一つ、「誰+か」は不特定の「人」を指すという意味特徴の束縛を受けているがゆえ、それと同格関係を結ぶ後続成分も「人」という概念を表すものでなければならないということを見逃してはならない。逆にいえば、後続成分の引きたてを受けて、同格関係における「誰+か」は具体的な中身を持つものと変身するのである。

3.5. 並列関係を結ぶ場合

「誰+か」は「～か+誰+か」の形で並列関係を結ぶことができる。下記の例(63) (64) (65) (66)に示すように、並列関係における「誰+か」は、はっきりとしないが、どちらかであるという話し手の不確かな気持ちを表すものとしてとらえられる。

橋本文法では対等の関係を表す「か」を「並立助詞」として位置づけられている⁴⁾。本稿は、そのような意味を表す「か」の用法を不定の意味を表す「か」の用法と意味的につながるものとして認める。

(63) 昔から口寄せの巫女をしていたと云う事だけは、母親か誰かから聞いていました。（芥川龍之介【妖婆】）

(64) 扉に手をかけて中をのぞいたが、いいあんばいに、誰もいない。火星人の番兵か誰かが、扉のかぎをかけ忘れて、どこかへ行ってしまったらしい。（海野十三【火星兵団】）

(65) もう一つはどこかの大学の学部長か誰かの説明で、卵の内部が流動体であることが一つの理由であろうという意味のことが書いてあった。（中谷宇吉郎【立春の卵】）

(66) 私は最後の申立てをしたいと求めた。人々は私をここに置いて、検事か誰かを呼びに行った。（豊島

与志雄【死刑囚最後の日】）

例(63)では並列構造としての「母親か誰か」が格助詞の「から」を伴い、補語として機能し、例(64)では並列構造のものが主語として機能している。例(65)では「学部長か誰か」が格助詞の「の」を伴い、連体修飾の修飾部として機能し、例(66)では「検事か誰か」が格助詞の「を」を伴い、目的語として機能しているのである。意味的には「母親か誰か」「火星人の番兵か誰か」「学部長か誰か」「検事か誰か」が対等関係にあると考えられる。

しかし、統語的には、前置成分と後置成分の前後関係は変えることができない。具体的な概念を表す「母親」「火星人の番兵」「学部長」「検事」は常に漠然とした概念を表す「誰+か」の前において機能しなければならない。つまり、同格関係を結ぶ場合の「誰+か」が常に前置成分として機能するのと異なって、並列関係を結ぶ「誰+か」は常に後置成分として機能しなければならない。このことは例(58)～(62)と例(63)～(66)を比較してみても一目瞭然である。

4. まとめ

以上、いわゆる不定を表す「誰+か」の構文的分布について、統語的特徴や意味の特徴、さらに文環境も射程に入れて分析を行った。「誰+か」は構文上、主語や述語、さらに補語として機能するが、意味上、単に漠然とした概念を表すのみならず、文環境の違いによって、具体的な概念を表すこともある。このような見解はこれまでの研究を超えて、「誰+か」の分布状況がいつそう明らかになったように思われる。以上の分析を改めてまとめると、次のようになる。

- ①「誰+か」という形式は、格助詞を伴うことができるので、一つのまとまった概念を表す内容語として認めることができる。
- ②「誰+か」という形式は漠然とした意味内容表すのが普通であるが、同格関係を結んだ場合は、必ずしも漠然とした意味内容表すのではない。
- ③並列関係を結ぶ場合の「誰+か」は後置成分として機能しなければならない。

注

- 1)「不定」を表す日本語の表現は「誰+か」のほかに、「どこ+か」「何+か」「いつ+か」もあるが、本稿のテーマと関係がないので、ここでは取り上げないことにする。
- 2) 仁田義雄（1989）では命令、誘い掛け、意志・希望を表す

モダリティ表現を「働きかけ」のモダリティとして位置付けられている。

- 3) 10人の日本語話者にアンケート調査をしたところ、8人からこの場合、文が自然となるという答えが得られた。
- 4) このことについて、橋本進吉（1959：125-130）の第五章を参照されたい。

文献

- 三上章（1953）.『現代語法序説』東京：刀江書院（復刊 1972 くろしお出版）.
- 橋本進吉（1959）.『国文法体系論』東京：岩波書店.
- 三尾真理（1979）.「疑問詞とその用法」『日本語教育』, 36号：73-90.
- 尾上圭介（1983）.「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』, pp.404-431, 東京：明治書院.
- 奥津敬一郎（1984）.「不定語の意味と文法—「ドッチ」について—」『都大論究』, 21号：1-16.
- （1985a）.「統・不定語の意味と文法」『人文学報』, 173号：1-23.
- （1985b）.「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』, 22号：1-12.
- 森山卓郎（1988）.『日本語動詞述語文の研究』東京：明治書院.
- 益岡隆志・田窪行則（1992）.『基礎日本語文法改訂版』東京：くろしお出版.